

a 学校教育目標	夢と志をもち、たくましく生きる子どもの育成	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命) 夢と志をもち、地域を誇る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 基礎学力の確実な定着、自己肯定感の高揚、健やかな体作りの3本柱に取り組みながら、ひとり一人が社会で通用する力をつける学校づくりをめざす。
----------	-----------------------	----------------------	---

評価計画					自己評価					改善方策	学校関係者評価				
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	3月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l 評価			m コメント	
					h 達成値	h 達成値					イ	ロ	ハ		
確かな学力	基礎・基本の確実な定着を図る。	○授業力の向上を図り、「学ぶ喜び」のある授業を創造する。	○基礎・基本定着状況調査及び市標準学力調査の平均通過率を向上させる。 【方策】 ① 授業改善を図るため、一人2回以上の研究テーマに沿った授業研究を行う。 ② 朝のドリル学習を週2回行い、担任者会で状況把握をしていく。	○基礎・基本定着状況調査の県平均をすべての教科で上回る。 ○市標準学力調査の市の平均通過率を上回る学年80%以上にする。	80%	100%	100%	125%	A	○最終評価は、三原市標準学力調査の結果をもとにした。 ○各学年が全ての教科で三原市平均を上回った。 ○通過率30%未満の児童も、すべての教科において0人だった。 ○研究教科の算数科においては、各学年とも特に落ち込んでいる観点がない。授業改善の成果である。 ○国語においては、落ち込んだ観点が、各学年にそれぞれある。特に「話す・聞く能力」と「書く能力」に課題がある。自分の考えを表現するために、話したり書いたりする学習が不十分であるとする。	○算数科の授業研究で行った「思考力を育む場と時間」の工夫を、各教科に活用する。 ・45分間で、まとめ・振り返りまでする。 ・自分で考える場とみんなで考える場をつくる。 ・全員が学習規律を守る。 ○「話す・聞く能力」や「書く能力」を総合的に高めていきたい。そのために、課題解決学習を意図的に仕組む。課題に対する自分の考えを交流したり、新たな発見をしたり、それをまとめて発表したりさせ、学習活動の中で力を付けさせたい。	○			・良く努力されていることが見受けられる。 ・共通課題を全校で診断し、きめ細かな指導と手立てを繰り返し、成果が定着している。 ・授業に集中する力もついてきている。 ・地道な努力が成果に結びついている。 ・書く活動については、継続的に取り組んでいきたいところだ。
豊かな心の育成	自己肯定感を高揚させる。	○目標を持ち継続的に努力する児童を育成する。	○月ごとの児童会の重点目標を設定し、達成できた成就感を味わわせる。 【方策】 ① 毎日の下校時に児童会役員が点検する。 ② 月の終わりに児童各自が自己評価し、達成状況を全校で確認する。	○月ごとに児童に達成状況を反省させ、目標が守れたといえる児童を80%以上にする。	80%	100%	100%	125%	A	○1学期から、児童会で月ごとに生活目標を決め、全校児童に示してきた。 ○生活目標は、4月「1列に並んで登校する」、5月「集合する時は、静かに集まる」、6・7月「ろうかで騒いだり走ったりしない」、9月「けがをしないように周りを確認して安全に生活する」、10月「周りを見て5分前行動をする」、11・12月「気持ちの良いあいさつをしよう」、1・2月「友達を大切にしよう」とした。 ○児童会役員が、下校時に生活目標を達成したか児童に投げかけて、自分で振り返る時間を確保した。また学級では、朝の会や帰りの会で、生活目標をベースにした一日の目標を決めた。このように、月目標を常に意識させ、全校児童が一堂に会して振り返る時間を設定したことが、目標達成につながった。	○達成できた成就感を更に高めるため、月々の達成度の「見える化」を工夫する。 ○来年度も、生活目標達成に向けた取組を、児童会の活動に位置付け、自覚を持たせる。評価も、児童の自己肯定感を高めることを目標にして、肯定的評価をする。	○			・学校・児童・地域ボランティア等の協力もあり、よい。 ・児童会を中心に、児童自身が気にかけて取組を進めることが成果につながっている。自己肯定感の育成ができています。
健やかな体の育成	生活や学習の基盤となる基礎的な体力の充実を図る。	○目標に向かって継続的に体を鍛えることができる児童を育成する。	○新体力テストの種目のうち、数種類を重点種目に設定して測定し、全国平均を上回る項目を増やす。 【方策】 ① 握力と50メートル走について、体力づくり担当から改善策示し、学期ごとに測定していく。 ② 体育朝会や休憩時など、固定遊具を使った運動や学校林を活用した運動を行う。	○重点種目に設定した運動について、毎学期末に測定し、その結果が全国平均を上回る児童を70%以上にする。	70%	48%	73%	104%	A	○10月実施の新体力テストで、全国平均を上回った児童は、全校で「50メートル走」が80名(72%)、「握力」が83名(74%)に増えた。 ○高学年は、外部講師を招いて、体力向上につながる指導方法を学んだ。また、体育の授業や家庭学習に握力アップのエクササイズなどを取り入れたことが、記録の向上につながっている。 ○2学期からは、学年実態に応じたサーキットトレーニングを、体育の時間に取り入れた。のぼり棒や鉄棒などの活動を多く取り入れたことが、握力向上につながった。	○来年度の新体力テスト実施には、児童に前回の記録を伝え、児童一人一人の目標を明確にする。 ○児童の体力実態を家庭に伝え、家庭を巻き込んで、体力向上に取り組む。	○			・外遊びや朝会・体育の授業の充実など、体力向上の取組を全校で実施したことがよい。 ・課題解決のための方策を具体化し、継続することで成果がでていいると思われる。引き続き取組を進め、すべての児童に力を付けてほしい。

【j:自己評価 評価】

A:100≦(目標達成)

C:60≦(もう少し)<80

B:80≦(ほぼ達成)<100

D:(できていない)<60

【l:学校関係者評価 評価】

イ:自己評価は適正である。ロ:自己評価は適正でない。

ハ:分からない。